

国語教室

さざなみ国語教室

第526号 2026年 1月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

童謡『たきび』の町

畑山敏則

一 翼 聖歌について

かきねのかきねの まがりかど
たき火だたき火だ 落ち葉たき
童謡『たきび』の作詞者の翼聖歌
(たつみせい) (一九〇五〜七
三) は、私の出身地の岩手県紫波
町の名誉町民です。

翼氏は、鈴木三重吉の主宰する
『赤い鳥』に作品『水口』が載り
ました。『赤い鳥』は、世俗的な
下卑た子どもの読み物を排除して
純麗な読み物を授けるためにでき
ました。彼は北原白秋に師事し、
新美南吉を童話作家として世に
出した人でもありました。
それゆえ私は、ライフワークと
して彼を研究して小説にでもま
めようかなと考えています。

二 吉永幸司先生との出会い

さて、私と吉永先生の出会いは
平成六年、筑波大学附属小学校で
説明文の授業を参観した時からで
す。その日は暑い中の授業でした。
でも先生は、いい教材『季節とわ
たし』を準備して実にうまい授業
を私たちに公開してくれました。
また平成十年に、「新しい国語
実践」の研究会が山梨県河口湖で
あり、ご一緒させていただきまし
た。

私は、青森県の郡小国研で先生
の著作の『京女式ノート指導術』
を会員に勧めました。とても分か
りやすく、授業づくりに役立つこ
とを紹介しました。

「国語教育は人間力」という先生
のこの考えに共感しています。

また、『さざなみ国語教室』は
なんと五二〇号の発行。まさに驚
異的です。青木幹勇先生の『国語
教室』でも二〇〇号なのに。

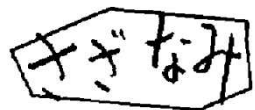
ところで私は、吉永先生を中心
に研究会があるのがとても羨まし
いです。今後私も一緒に学びたい
と思っています。

三 私の国語教育実践

私の国語授業では、主に書き込
みを取り入れた指導をしてきまし
た。言葉に着目して自問自答する
授業。同化や異化する読み方をめ
ざしてきました。また、生涯読書
人の育成に読書指導もしてきまし
た。各学年で読ませたい作者・本
を整理しました。ほかに季節感に
敏感な子どもを育てようと俳句や
詩の授業も行いました。自然に目
を向けて、小さいもの・弱い物
にも温かいまなざしを向けること
ができる感性豊かな子の育成に努
めました。

でも青木先生のように教材研究
として筆で教材文を視写するまで
はできませんでした。

(元青森県戸来小校長)



▼知人から奥さんの
病院での体験談を聞
いた。病気がちで整
形外科に通う奥さん
は、診察のたびに医
師から丁寧な説明を
受けるという。原因
や工夫の仕方、日常
生活での注意点を
で、患者が納得できるような一つひ
とつ言葉を尽くしてくるそう
だ。帰宅した奥さんは、その内容
をわかりやすく夫に伝え、自身の
健康管理に役立てている。知人は
「話を聞いただけに、明日何
をすればよいかがはつきりわか
る」と、その話し方に深く感心し
ていた▼この話を聞きながら、授
業の様子を思い浮かべた。子供た
ちは家で、学校において学んだこ
とをどれほど語れるだろうか。と教
科名だけを話す。「僕の意見を
先生が分かりやすいと言ってくれ
たよ。それはね。」と具体的に話
す子もいる。「特にない」と言う
子も珍しくない▼知人の奥さんの
例で言えば、医師は相手が理解し、
質問したくなるように具体的に方
法や意味を伝える工夫をしている
とのこと。同じように、授業も「子
供が家で自分の言葉で話せるか」
を意識して授業計画を考えたい。
教室で一斉に教えた内容を伝える
だけで満足するのではなく、子供
が誰かに語れるほど理解できたか
どうかを大切にしたい。その視点を
持つことで、学びはぐっと深まる。
▼具体的に授業で得た気づきや驚
きを家で語れるか。授業における
その小さな工夫が、子供たちにお
ける確かなものにし、学ぶ力を育
てる一歩になる。

(吉永幸司)

『くじらぐも』の振り返り

川部 長人

『くじらぐも』の単元が終わり、子どもたちと一緒に振り返りの時間をもった。黒板いっぱい広がつた子どもたちの言葉は、まるで空に浮かぶ雲のように自由で、のびやかだった。今回の単元では「おもいかべながら読もう」というテーマのもと、音読や視写を通して、物語の世界に入り込みながら、自分の感じたことや考えたことを言葉にすることを大切にしていた。

振り返りの板書には、「ことばのふくろにあたらしいことばをたくさんみつけれた」「かぎかつこ(一)をつかって、とうじょうじんぶつがはなしているところをかくことができた」など、子どもたちが自分の学びを具体的に言葉にしている様子が見られた。特に印象的だったのは、「天までとどけ、『一、二、三』のところをがんばった」という声が多くあったことだ。音読の場面で、跳ぶ高さに合わせて声の大きさを変える工夫をしたことが、子どもたちの中で強く残っていたようだった。また、子どもたちにとって、音読は「できる・できない」ではなく、「どう読めば伝わるか」を考える活動へと変わりつつある。これは

日々の授業で友達の音読を聞き合い、良いところを見つけ合う時間を積み重ねてきた成果でもある。

この単元では、視写の学習を通して「書かれている文章にこだわって話す」姿が多く見られた。例えば、「三十センチ」「五十センチ」「空まで」と跳ぶ高さに変化する描写に注目し、「だから声もだんだん大きくする」といった読み方の工夫が生まれた。こうした言葉へのこだわりは、視写によって文章を丁寧に読み取る力が育ってきたからこそだと感じている。

また、振り返りの中には「ていねいに字をかくのをがんばった」「プリントにうつす、ししやをがんばった」といった言葉もあった。これは、学びの過程そのものを大切にしている証だと思う。ただ読む・書くのではなく、どう読んだか、どう書いたかを自分の言葉で振り返ることができるようになってきた。

『くじらぐも』の実践を終えて、子どもたちは言葉の力を少しずつ身につけている。これからも、物語の世界に入り込みながら、自分の感じたことを自分の言葉で語ることをできるよう国語の授業を続けていきたい。振り返りの黒板に並んだ言葉の一つひとつが、子どもたちの成長の証であり、次の学びへの力になっていくと信じている。

(湖南市立菩提寺小学校)

「実感」から学ぶ
井上 混斗

説明文の学習は、情報を正確に受け取り、活用する力を養う重要な機会である。そこで本学級では、教科書教材「紙コップ花火の作り方(まつばやしさわこ作)」を軸に、あえて「わかりにくい説明書」と比較させる活動を取り入れ、言葉の選び方や構成の重要性を実感させる指導を試みた。

まず、教師が作成した不完全な説明書①「写真が抜けている」を提示し、実際に紙コップ花火を作らせた。児童からはすぐに「これじゃわからない」「どこを切ればいいの?」といった困惑の声が上がった。この「作れない」という切実な経験を起点とし、段階を追って改善版の説明書を提示していく手法をとった。

次に、②「写真の下に説明の文章がない」ものを見せ、視線の誘導の大切さを確認した。続いて、③「表現があいまい」なものを通して正確な語彙の必要性を、④「順序を示す言葉と小見出しが抜けている」ものを通して文章構造の重要性を、それぞれ検討させた。

最後に、全ての工夫が凝縮された「まつばやしさんの説明書」を提示した際、児童からは「全然違う!」「これなら絶対作れる」と、驚きと納得の声が上がった。欠陥

のある文章との比較を繰り返したことで、教科書の文章に隠された「わかりやすさの工夫」を、児童が自ら発見していく姿が見られた。

この展開を経て、生活科で取り組んだ「うごくおもちゃ作り」での経験を、国語科の「説明書の書き方」の学習へと繋げた。自分たちでおもちゃを工夫して作った経験があったからこそ、児童は教科書が提示する「わかりやすさの秘密」を自分事として切実に捉えながら、説明書作りを取り組んだ。

おもちゃの作り方の説明する際、児童は『まず』『つぎに』を使わないと順番がわからないよ』『写真はこの説明のすぐ下にならないと迷うよ』など、不完全な説明書での失敗を想起しながら推敲を重ねた。また、「テープでつなげる」といった曖昧な表現を避け、「上から下までテープでつなげる」といった、誰が読んでも同じ動きができる詳しい言葉を使うことが「わかりやすさの秘密」なのだを意識して書く姿が印象的であった。生活科での「作る」経験と言葉が結びついたことで、児童は「相手に正しく作ってもらう」ための表現に対して極めて自覚的になった。完成した説明書を読み合った際、ある児童が「秘密を全部使ったから、ちゃんと伝わったんだ」と口にしたことは、表現の力を自分のものとした証であった。

(豊郷町立日栄小学校)

ねこの「しかられて」 岡嶋 大輔

二年生の教室。大久保ティ子さんの詩「ねこのこ」(光村図書二年下)を扱った学習。
本文が掲載されている教科書は閉じておいて、代わりに、

ねこのこ
あくび ()
あまえて ()
たまご ()
けいと ()
かくれても ()
しかられて ()
よばれて ()
ミルクで ()
と、各行の後半部分を伏せたワークシートを配付した。

まず、『あくび』の後には、どんな言葉が入ると思いますか。と問うた。この問いだけではまだ、首をかしげる子も多い。数秒後、「作者のティ子さんは、『ゆうゆう』という言葉を書きました。」と伝え、『ゆうゆう』というのは、どういうことでしょうか。と問うた。猫の子があくびをしている「見た目」「うき」といったキーワードが出てきたので、「ようす」「音」というキーワードも付け加えて示した。そうして今度は、「ティ子さんは『ゆうゆう』と書きましたが、他に言葉が思い浮かぶ人はいますか。」と問うと、「にゃああん」「ふああん」「あわあわ」等と出された。そして、他の伏せた部分を各々で考える時間をとった。その際、ティ子さんも言葉を考えたけれど

それ以外が間違いというわけではなく各々で考えた言葉も「素敵な言葉」であることを話した。

その後、一行ずつ、伏せた部分について言葉を出し合った。学級の大半の子が挙手したので、席の順に私の呼名後、発表していき、それぞれについて私が一言コメントを付けていくといったように、挙手した全員が発表できるようにテンポアップして進めていった。たとえば「しかられて」の後の言葉。「にゃおん」「にゃん」「しゅんぼり」「しゅん」「ぶるぶる」「しゅん」「しゅん」「ぶるぶる」「きどき」「にゃあ」「ぶるぶる」「きどき」といったように出された。子猫が叱られて、驚いたり、恐れったり、悲しんだり、怒ったり、しゅんとしたりと、その様子を様々に想像していることが伝わってくる。私は、「それは怒っているの?」「びっくりするの、分かるねえ。」といったように確認したり、補足したりしていった。そういったコメントをしたり、発表者に注目を集めたり、出された言葉に意味付けをしたり、聞いている子らの想像を助けたりできると感じた。そして、「しかられて」で、ティ子さんはどう表現したか。私が黒板にゆくり「しゅん」と書くのと、自分と似ている「同じ」「しゅんとするの?」といったように様々な反応があった。

(野洲市立北野小学校)

のりものカードを作ろう

山田 定子

子ども達は、今まで身近な生活の中で行ったことや、見聞きした出来事などから、書くことを見つけてきた。また、説明文を学習した後には、図鑑や他の絵本などを参考にして、本文をまねながら簡単なお話を作り、友だちと交流してきた。

今回も「いろいろなふね」の説明文を学習した後、自分で調べたみたいのりものについて、「のりものカード」を書き、友達と交流する学習を計画した。

まず、説明文「いろいろなふね」を文章のモデルとするためには、説明の簡単な構成を見つけることが大事である。「いろいろなふね」で繰り返された「やく目」と「つくり」についての書きぶりをもとにして、ほかの船についての簡単な説明文を書くことにした。例えば、かもつせん、タンカー、はんせんなどについて、図鑑や絵本で調べ、本文をまねながら話を書いた。どの子も、書き方がわかっていたので、二つ、三つとお話を書くことができた。これを足がかりにして、自分の調べたい乗り物を決め、図鑑や絵本などで「やく目」や「つくり」などについて調べて文章を書き、さし絵も入れて「のりものカード」を作った。いろいろな「のりものカード」の構成をまねれば容易に書くことができると思

い、いくつも書く子がふえてきた。また、図鑑などで調べることで、いろいろな乗り物のことが知れて、楽しくなってきたようである。同じような乗り物について書いている友達がいれば、書いている途中でも読み合ったりして、自分のカードを見直している姿も見られた。ほとんどの子が、何まいもカードを書いていた。その中で、特に、友達に紹介したいものを一つ選んで、厚紙に清書し、教室に掲示した。今まで、書くことに消極的だった子も、進んで友達の「のりものカード」を読んで、「こんな車があるのか。すごいね。」「お父さんのお仕事の車を書いたよ。みんな、わかってくれるかな。」「〇〇さんのカードは、お話も絵も、わかりやすいね。今度書く時、まねしよう。」

など、友達のカードのよいところ見つけもでき、よい交流となった。学習参観の日の時まで掲示していたので、保護者の方にも見てもらうことができた効果的であった。保護者の方から、次のような感想をいただいた。

◇いろいろなふねや車のことなど、やくめやおしごとをしっかりかんがえることができたね。えもいっぱいかいて、とつてもわかりやすかったよ。

◇たくさん「のりもの」について、いろいろなしらべられたね。いいべんきようがいっぱいできたね。

(東近江市立湖東第一小学校)

